

國學院大學學術情報リポジトリ

昔話資料に現れた方言特徴の検討：
関東方言の「ベー」を例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): 方言昔話資料, 方言の再現性, 関東方言, ベー, 推量・意志 キーワード (En): 作成者: 三井, はるみ, Mitui, Harumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000174

昔話資料に現れた方言特徴の検討

— 関東方言の「べー」を例として —

三井はるみ

1. はじめに

方言の研究は、フィールドでの聞き取り調査によるデータ収集を基本として研究が行われてきた。しかし一方で、昭和期後半以降、伝統的方言の衰退が進行し、日本語の地理的変異の諸相を体系的に把握することが難しくなると指摘されて久しい。現在より共通語化が進行する以前の、方言的特徴を豊かに持つことばがどのようなものであったかを知るためには、かつて調査によって取得された既存の方言資料を利用する必要性が高まっている。また、文法や談話を対象とする研究では、話者の意識に上らない面を含む言語の構造、運用を観察するために、方言談話の録音文字化資料が重要なデータとなっている。

このようなニーズの中で、本稿では、方言で記録された昔話資料（以下、方言昔話資料）に着目し、方言研究の資料として利用するための資料性の一端について検討を行う⁽¹⁾。

2. 方言資料としての昔話資料

方言昔話資料は、伝統的方言を語りのテキストの形で記録した大量の資料群であり、方言研究に活用できるものが多く見られる⁽²⁾。昔話集を方言資料の一つとして使用することについては、すでに井上史雄（1979）が、「方言が衰滅しつつあり、他方で昔話の忠実な文字化資料が刊行されつつある今⁽³⁾、昔話集を新たな目で見直すべきであろう。」と述べ、方言資料としての利点と留意点を考察するとともに、方言学・言語学のデータとして様々な活用ができることを、山形方言の例を挙げながら具体的に指摘している。

方言昔話資料を調査資料として用いた研究には、近年、文法形式の意味・機能の記述を扱った船木（2019）、文法形式の成立過程の推定を扱った野間（2014）、文法的要素、談話的要素の形式と運用の地域差を扱った酒井（2019・2021）、日高（2018・2022）、類義動詞の意味用法の違いを分析した木部（2014）、体系周辺

的な語彙である感動詞、オノマトペを扱った船木 (2022)、工藤 (2022) 等があり、方言資料としての一定の有用性が示されている。ただ、資料が多く存在することから見ると、いまだ十分に活用されているとは言えない。その理由として最も大きいのは、昔話資料を現実の方言を忠実に再現した資料として扱うことができるかどうかに関する懸念であろう。日高 (2020) が提言するとおり、資料の性質を精査し、知見を共有していくことが望まれる⁽⁴⁾。

方言昔話資料は、一義的には昔話を記録し、読み物として提供するための資料であって、方言・言語のできるだけ忠実な再現を目的とする一般談話の録音文字化資料とは性質が異なる⁽⁵⁾。そのような資料を用いるにあたっては、様々な留意点を踏まえた上で、方言研究資料として適していると目される資料について、具体的な言語事項の分析によって資料性の評価を行いながら利用を進めることが、活用の幅を広げることにつながると考える。

3. 本稿の目的

そこで本稿では、伝統的な地域方言で語られた全国の昔話を、「話されたままを文字にうつした」という編集方針で集成した昔話集である『日本の民話』(全 12 巻、1978～1979年、ぎょうせい)⁽⁶⁾を取り上げ、方言をどの程度どのように反映しているか、資料性の一端の把握を試みる。方言の特徴は音声、文法、語彙、待遇表現、談話進行等、言語体系全体に現れ、全国的にきわめてバリエーションに富む。その中のどのような特徴を取り上げるか、資料性の把握という目的からは様々な角度からの検討が考えられる。その中で今回はケーススタディとして、関東地方の伝統方言で広く使用される推量・意志の助動詞「べー」の現れ方を指標として確認してみることにした。関東方言の「べー」は、形態と用法の両面で、地域差と通時の変化があることが知られている。先行研究の記述と照らし合わせ、資料中の用例の形態と用法を検討することにより、昔話資料の方言の再現性の一面を把握し、今後、方言研究資料として活用する上での手がかりを得ることを目的とする。

4. 資料の概要

使用する資料は、シリーズ第 4 巻、谷本尚史・榎谷明・丸山久子編 (1979)『日本の民話 4 関東』である⁽⁷⁾。シリーズ全巻共通のまえがき「話のかけ橋に」には次のような編集方針が記されており、各巻の編者が採録し忠実な文字化を心がけたことが示されている。

島には島の話、山国には山国の話がそのくにぐにの心をこめて、お国言葉の方

言でかわされてきました。〈略〉「日本の民話」のどの話も、話し手の村里に編者が出むいて、話されたままを文字にうつしたものです。なまの話ですから話上手な人や話べたな人やさまざまですが、現代の日本民話のありのままの素顔が出ております。

採録年は明記されていないが、巻末の「解説」によると、刊行からあまりさかのぼらない時期に、この昔話集のために現地で採録が行われたことがうかがわれる。

『関東』の巻には、「動物昔話」「昔語り」「笑い話」の3つのジャンルから121話が収録されている。採話地（当時の市区町村）と収録話数、話者数は表1のとおりである。

表1 『日本の民話4 関東』 都県別採話地、収録話数、話者数

都県	採話地	話数	話者数
	市区町村		
茨城県	久慈郡大子町	11	3
栃木県	塩谷郡栗山村・藤原町、黒磯市	9	5
群馬県	多野郡上野村、利根郡利根村、吾妻郡吾妻町・嬭恋村・六合村、甘楽郡下仁田町・南牧村	44	26
埼玉県	秩父郡大滝村、川越市	8	4
千葉県	市原市	25	1
東京都	葛飾区	3	1
神奈川県	秦野市、藤沢市	21	10
合 計		121話	50名

昔話の語りの盛んな群馬県は収録話数も採話地も多く、話数全体の三分の一、話者数の二分の一を占めるのに対し、話数はある程度多いが話者は一人である千葉県や、話数がわずかでその内容も世間話的な話（特定の時代・場所・人物に言及する話）である東京都など、収録内容には偏りが見られる。用例数を比較する際には注意が必要である。

話者は、明治17（1884）年から大正11（1922）年生まれの50名（不詳1名）。平均生年1899（明治32）年。明治20～30年代生まれが39名を占める（巻末「語り手紹介」）。他の資料の話者と比較すると、国立国語研究所編（1966-1974）『日本言語地図』の話者は、調査時の条件が明治20（1887）～36（1903）年生まれ、平均生年が1894.6（明治27）年、国立国語研究所編（1989-2006）『方言文法全国地図』の話者は、調査時の条件が原則として大正末年（1925）年以前生まれ、平均1911.0（明治44）年である（鍵水2010, 2013）。『日本の民話』の話者は、『日本言

語地図」に近く、『方言文法全国地図』よりやや上の世代ということになる。昔話の語りの中に地域の日常の方言が反映されているとすると、共通語の影響の少ない伝統的な方言の状態が記録されていることが期待される。

5. 対象とする形式

推量・意志の「べー」は、現実の方言で形式にバリエーションがあり、さらに本資料中では、「べえ」「べえ」「べあ」「べ」「べ」など様々な表記される。「びゃあ」のように終助詞と融合しているとみられる例もある。これらすべてをまとめて「べー」として扱う。また、関連する形式として、否定推量・意志の「まい」「めえ」「め」などの融合形も、共通語と同じ「だろう」「でしょう」「(よ)う」「ましよう」を対象とする⁽⁸⁾。共通語と同じ形式（以下、「共通語形式」という）がどのように現れるかは、方言資料としての性格を把握する上で一つのポイントになると考えられる。

『日本の民話 4 関東』には次のように多くの「べー」の例が見られる。以下用例を挙げる際には、本文の傍注・話末注・補注を { } 内に、筆者による共通語訳や注釈を [] 内に、例文末尾に（巻内の通し話番号 話の題：採話地）の形で出典を示す。また < > 内に用法を示す。

- (1) 「おとつあんとおっかさん、川さの前だか {川の前だから} 雨が降ったら流れべなあ [流れるだろうなあ]〈推量〉
(10あまがえるの鳴き声：茨城県久慈郡大子町)
- (2) 「まあよかった。これで貧乏神、追っ払ったから、これからはちっとはいいことがあるだんべ [あるだろう]〈推量〉
(100何が一番こわい：群馬県吾妻郡六合村)
- (3) 「あのおっかさん憎らしくってしょうがないから、殺したいから葉なかんべか [ないだろうか]〈推量〉 (69嫁と姑：栃木県黒磯市)
- (4) みみずが歌、歌うべえよ [歌うだろ?]、「コーロ、コロ」雨の降るとき。
〈確認要求〉 (9 蛇とみみず：茨城県久慈郡大子町)
- (5) 和尚さんが帰って来て、お茶わかして、柿食うべえ [食おう] と思ったら一つもねえで〈意志〉 (79柿は羅漢さん：群馬県吾妻郡六合村)
- (6) 「たぬきやたぬきや、今日はボヤ {燃料にする雑木} 拾いに山へ行くべや [行こうよ]〈勧誘〉 (16かちかち山：群馬県利根郡利根村)

6. 関東方言の助動詞「べー」の特徴

『日本の民話』の「べー」の使われ方と比較するため、先行研究（飯豊他（1984）、

井上（1985）、国立国語研究所（1993・2002）、篠木（1993・1994）、白岩（2011）等で明らかにされている、関東方言の「べー」の特徴を略述する。「べー」は東日本の東北、関東に広く分布し、関東の伝統方言では東京都心部を除いて全域で使われていた。古典語「べし」の連体形に由来するため「助動詞」とされるが、形態変化がなく、テンスの分化もないなど、「べし」とは性質が大きく異なる。ここでは『日本の民話』の用例の検討でポイントとなる、「接続」と「用法」の二つの点について⁽⁹⁾、伝統的関東方言の「べー」の特徴を地域差を含めてまとめ、下の世代で生じている変化に言及する⁽¹⁰⁾。詳細な地域差や地点数の少ない語形には触れず⁽¹¹⁾、広く該当する特徴を中心に挙げる。

6. 1. 接続

6. 1. 1. 「べー」の接続

述語の種類ごとに「べー」の主な接続を挙げると表2のようである。形式のバリエーションがある場合は、おおまかな地域を県単位で示せる範囲で記載した。

表2 伝統的関東方言の「べー」の接続

述語の種類			接続	語例	例		その他
					西関東、栃木	茨城、千葉	
動詞	非過去	五段活用	終止形	書ク	書クべー		
		一段活用	語幹	起キル 受ケル	起キべー 受ケべー		
		「来る」	「ク」「キ」 「コ」		クべー・キべー		「コべー」は 神奈川で優 勢
		「する」	「ス」「シ」		スべー・シべー		
	過去		旧連体形	書イタ	書イタンべー	書イタッべー	<書きたる べき
形容詞			カリ活用の 連体形	高イ	高カンべー	高カッべー	<高かるべ き
形容動詞			旧連体形	静カダ	静カダンべー	静カダッべー	<静かである べき
名詞述語			旧連体形	雨ダ	雨ダンべー	雨ダッべー	<雨である べき

※ 否定辞は形容詞、ノダ形式は名詞述語に準じる。

※ 後述のとおり、この他に動詞、形容詞に接続する「ダンべー」という形式がある。

五段活用動詞は終止形、一段活用動詞は語幹に接続する。「クバー」と「キバー」、「スバー」と「シバー」は、ほぼ関東全域に分布しつつ同一県内でも地域差がある。動詞過去（他の述語の過去も同じ）、形容詞、形容動詞、名詞述語はいずれも古い連体形に接続し、西関東、栃木ではその末尾音「ル」が撥音化した形、茨城、千葉では促音化した形が用いられる。

これに対して下の世代では、五段活用動詞以外もすべて終止形に接続する形が増えている（井上1985・1991、篠木1993、白岩2011）。井上（1985）はこのような接続の単純化を「ベの終助詞化」と言う。

例⁽¹²⁾：書クバー、起キルバー、クルバー、スルバー、書イタバー、書カネーバー、書イタンダバー、高イバー、静カダバー、雨ダバー

6. 1. 2. 推量専用形式「ダンバー・ダッペー」の接続

表2に挙げた「バー」のほかに、動詞、形容詞に接続する形式「ダンバー・ダッペー」がある。名詞に「バー」が接続した「雨ダンバー・雨ダッペー」などの断定辞以下と同じ形⁽¹³⁾。動詞、形容詞、および（他の述語を含めた）過去形、否定形の終止形に接続する。「ダンバー」で例示する。

例：書クダンバー、起キルダンバー、クルダンバー、スルダンバー、書イタダンバー、書カネーダンバー、高イダンバー

後述のとおり、「バー」と異なり、「ダンバー・ダッペー」は推量専用形式である⁽¹⁴⁾。

6. 2. 用法と地域差

6. 2. 1. 「バー」と「ダンバー・ダッペー」の用法

「バー」は、大きく分けて「推量」および関連する「確認要求」の用法と、「意志」および関連する「勧誘」の用法を持つ⁽¹⁵⁾。「ダンバー・ダッペー」は「推量」「確認要求」の用法を持つ。

6. 2. 2. 地域差

図1と図2に、『方言文法全国地図』（GAJ）109図「書こう」〈意志〉と112図「書くだろう」〈推量〉の関東地方の略図を示す。共通語と同じ形式もかなり回答されているが、「バー」の類に着目して分布の概観を記すと次のとおりである。西関東（群馬・埼玉・東京多摩・神奈川）では、推量を「ダンバー」、意志を「バー」で表す（カクダンバー〈推量〉／カクバー〈意志〉）。東関東（栃木・茨城・千葉）では、「バー」で推量も意志も表す（カクバー〈推量〉〈意志〉）。千葉では推量に「ダッペー」も使う⁽¹⁶⁾（カクバー、カクダッペー〈推量〉／カクバー〈意志〉）。西関東でも西の縁から隣県にかけては、「カクバー」で推量も意志も表す地点が南北に連なっており、古い体系を残す⁽¹⁷⁾。なお西関東の下の世代では、推量を「ダンバー」、意志を「バー」で表し分ける体系から、再び「バー」で推量も意志も表

す体系への変化が見られる（佐藤2013）。

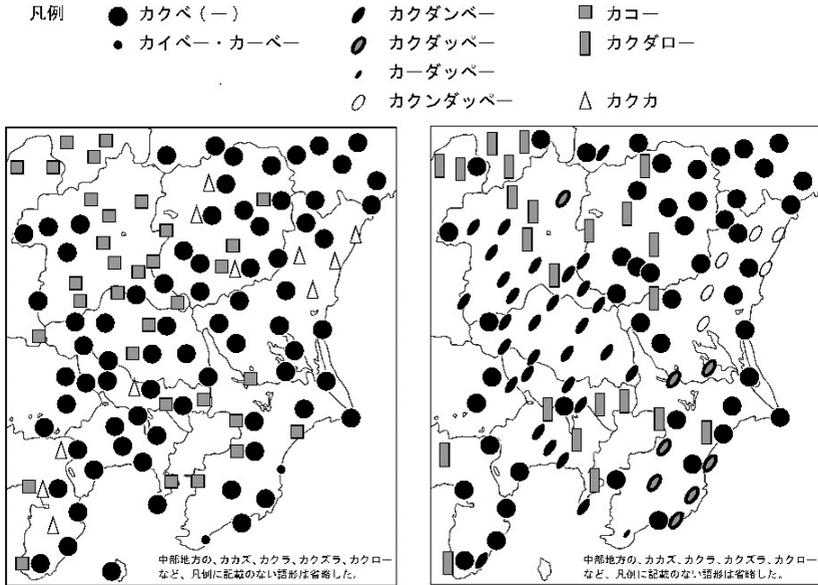


図1 書こう〈意志〉

(GAJ第109図「手紙を書こう」とつぶやくとき)

図2 書くだらう〈推量〉

(GAJ第112図「あいつはたぶん手紙を書くだらう」)

以下、これらの先行研究の知見を踏まえて、『日本の民話』の用例について検討する。各形式の都県別出現数（7節）、「ペー」の接続（8節）、各形式の用法（9節）、動詞に接続する「ペー」「ダンベー・ダッペー」の用法と地域差（10節）の面から取り上げていく。

7. 各形式の都県別出現数

はじめに、5節に挙げた推量、意志を表す諸形式の都県別の出現状況を見る。

表 3 推量、意志を表す各形式の都県別出現数

都県		ベー	ダンベー	マイ	(ヨ)ー	マシヨー	ダロー	デシヨー	ガンシヨー	計	話数
東 関 東	栃木	10		2	3		1(1)	3(1)		19	9
	茨城	17		2						19	11
	千葉	26	2		1			2		31	25
西 関 東	群馬	94	3	1	3	2		1		104	44
	埼玉	4			6			2	1	13	8
	東京				1					1	3
	神奈川	7			10	2	6	2(1)		27	21
計		158	5	5	24	4	7	10	1	214	121

※「ダンベー」= 6. 1. 2. の推量専用形式のダンベー・ダッペー。

※「ダロー」「デシヨー」= () 内はノダロー・ノデシヨーの数。内数。

各都県の用例数の合計に違いがあるが、これは収載されている話の数の違いによるものである。表の右側に挙げた各都県の収載話数を参照。

全体では方言特有形式（特に「ベー」）が圧倒的に多い。方言の丁寧な形式である「ガンシヨー」も 1 例見られる。『日本の民話』のテキストが基本的に方言で書かれていることがうかがわれる。一方、共通語と同じ形式（(ヨ)ー、マシヨー、ダロー、デシヨー）もある程度使われている。その割合は都県によって異なる。茨城と群馬は、方言形式のみか、方言形式が大多数を占める。栃木、千葉がそれに次ぐ。一方、埼玉、神奈川は共通語形式の方が多い。東京は共通語形式 1 例のみである。詳細には話ごとの出現状況を検討する必要があるが、大局的には、各地の実際の言語状況の違い、すなわち、方言中心地域であるか、共通語使用地域であるかという違いを反映していると見ることができる。

8. 「ベー」の接続

次に、「ベー」の接続について見る。表 4 は、「ベー」の前接形式別の用例数である。表右側に推量専用形式の「ダンベー・ダッペー」の用例数を併せて挙げた。

表4 『日本の民話4 関東』に現れた「べー」の接続

	前接形式		例	べー						計	ダッペ	ダンベ
				栃木	茨城	千葉	群馬	埼玉	神奈川		千葉	群馬
1	五段活用	終止形	飲むべえ、あるだんべ	2	3	19	46	1	2	73	1	2
2		語幹-i	借りべえ		2		11		1	14		
3	一段活用	語幹-e	食べべえ	1	2	1	11	1		16		
4		終止形	〜てみんべえ、知ってるだっぺ				2			2	1	
5	動詞	来る	ク	くべえ		1		4			5	
6			キ	きべえ			1				1	
7			クル	くるべえ	1						1	
8	する	ス	すべえ			2	2	1	1	6		
9		スル	するべえ				1			1		
10	過去	旧連体形	食ったんべえ・死んだっぺ	1	2	1	1			5		
11		終止形	ゆつつけたべ、食っただんべえ				1			1		1
12	否定	カリ活用連体形	貸さなかんべえ				3			3		
13		終止形	(貸さないべ)							0		
14	形容詞	カリ活用連体形	こわかんべえ	3			7	1		11		
15		終止形	(こわいべ)							0		
16		その他	ようっぺ・ひどっぺ			2				2		
17	形容動詞	旧連体形	上手だんべ						1	1		
18		終止形	(上手だべ)							0		
19	名詞述語	旧連体形	うそだんべ・なんだっぺ	2	3		4			9		
20		終止形	もんだべさ						1	1		
21	句	旧連体形	来るからだんべ				1			1		
22	ノダ形式	旧連体形	作っただんべ		4					4		
23		終止形	あるだべえ						1	1		
計				10	17	26	94	4	7	158	2	3

※ 東京は用例なし。太字は新しい接続。()内は用例がない場合の想定される例。

細字が、6. 1. 1 で挙げた先行研究で明らかにされている伝統的関東方言の接続、太字が、下の世代で増えている新しい接続（五段活用動詞以外の終止形接続）である。新しい接続は全158例のうち7例だけであり、全体として伝統的関東方言の接続がよく保たれていることがわかる。

新しい接続が現れたのは、群馬4例、神奈川2例、栃木1例である。群馬は全体の用例数が94例と多いために、その中には新しい接続も現れやすかった可能性がある。一方神奈川は、全体の用例数が7例と少なく比率として高い。7節で見たように「べー」よりも共通語形式が多いことと併せて考えると、神奈川では他県に先駆けて「べー」が使われなくなっていくとともに、接続の面でも終止形接続という単純化が他県よりも進行している様相を反映していると考えられる。

次に伝統的方言の接続（(7)(9)）と新しい接続（(8)(10)）の例を挙げる。用例の後に表5の該当する行番号を付す。

- (7)「花敷のほうへでもまあ遊びに行ってみべえ。」〈意志〉= 2
 (48鎌倉の権五郎：群馬県吾妻郡六合村)
- (8)「鎌倉の権五郎になって飛び降りてみんべえ。」〈意志〉= 4
 (48鎌倉の権五郎：群馬県吾妻郡六合村)
- (9)湯さ入ったことねえ人だんべな。〈推量〉= 19
 (111ねぎは台所：栃木県塩谷郡藤原町)
- (10) そうしたらそのおおかみが、背中にのったのは| ムルってもんだべさ [も
 のだろうな] って思って 〈推量〉= 20 (13古屋のムル：神奈川県秦野市)

伝統的方言の接続、新しい接続のどちらにも当てはまらない形容詞の「16その他」は「ようっぺ」（= よい+べー）、「ひどっぺ」（= ひどい+べー）で、千葉県市原市田淵で採録された一つの話だけに現れる。「形容詞語幹+ッぺ」という接続である。『方言文法全国地図』第142図「高いだろう（推量形）」には、「タカッぺ」という「形容詞語幹+ッぺ」の形式が、関東地方の中で、採話地の市原市田淵と隣接する千葉県君津市久留里だけに見られる。このような使用地域の限られた語形も記録されていることがわかる。

- (11)「屁一つあさり一つで取っけえっこ {取りかえっこ} すべえじゃねえか」
 [略]「そりゃあようっぺ {いいだろう}」〈推量〉⁽¹⁸⁾ = 16
- (12)「じゃあ、あんまり船頭さんひどっぺから {ひどいから}、いくらでん銭
 くれる」〈推量〉= 16 (96屁で交換：千葉県市原市)

9. 各形式の用法

次に、5節に挙げた推量、意志を表す諸形式の用法について見る。表5は、各形式の用法別の用例数である。

表5 推量、意志を表す各形式の用法

	ペー	ダンペー	マイ	(ヨ)ー	マシヨー	ダロー	デシヨー	ガンシヨー	計
推量	36	5	5	2		7	6	1	62
確認要求	9						4		13
意志	92			20	2				114
勧誘	21			2	2				25
計	158	5	5	24	4	7	10	1	214

※「ダンペー」= 6. 1. 2. の推量専用形式のダンペー・ダッペー。

※「マイ」= 否定推量

ここでは各形式の用法を、推量・確認要求、意志・勧誘の4つに分類した。迷う例も、共通語の「だろう」の用法分類などをもとにさしあたりどれかに分類した。

「ペー」は推量(例文(1)(3))、確認要求((4))、意志((5))、勧誘((6))すべての用例がある。確認要求の用例数は推量に比べて多くない。「ダンペー」は推量のみ((2))。

否定推量の「マイ」は栃木・茨城・群馬に用例がある。古風な共通語でも使われるが(例:「そんなことはありますまい。」、ここでは方言としての例と見られる。

- (13) 「あんだ {なんだ}、屁がでてえぐれえなのがまんすることあんめえ [ないだろう]、屁えひつたらよかんべ」〈否定推量〉

(93屁ひり嫁：栃木県塩谷郡栗山村)

共通語形式は「(ヨ)ー」「マシヨー」が意志・勧誘、「ダロー」「デシヨー」が推量・確認要求の用法を持ち、使い分けられる。これは共通語と同じである。中に「(ヨ)ー」が形容詞に接続して推量の意味で用いられている例が2例ある。古い用法の残存の可能性もあるが、神奈川の話であり、全体が共通語的なことばであることから見て、昔話らしい古めかしい表現として使われているように思われる。

- (14) [小僧がお坊さんへの返答を考えている] なんとやったらよかろうと考えるとね、そばがきとはいわれなからねえ、〈推量〉

(114小僧とそばがき：神奈川県藤沢市)

- (15) お婆さんも心持ちのいい方だから怒りもしないで「そりゃ定めし寒
- かったろう
- 」と早く食事をしてやすんだってね。〈推量〉

(40笠地蔵：神奈川県藤沢市)

丁寧体の共通語形式が現れる環境を見てみると、「マショー」は会話 3 例・地の文 1 例、「デショー」は会話 1 例・地の文 9 例である。推量・確認要求を表す「デショー」のほとんどは語り手が聞き手を意識した場面に現れている。特に「デショー」の確認要求の例（栃木・千葉・埼玉）はすべて地の文で、語りの場の聞き手に向けられている。

- (16) [話の状況の解説] で、それをおそらぐさるが見つけたんでしょ。〈推量〉

(98運のよいにわか武士：栃木県塩谷郡栗山村)

- (17) 長介っていう名前はどこにでもあるようなもんで、呼び捨てに
- される
- でしょ、長介長介って。〈確認要求〉 (99長い名の子ども：埼玉県川越市)

以上、各形式の用法についても、先行研究の記述とおおむね一致することが確認できた。同時に、テキストの中には語りのことばとして、日常言語とは位相の異なる言い回しや、語りの場の聞き手を意識した表現などが一部見られることがわかった。

10. 動詞に接続する「ベー」「ダンベー・ダッペー」の用法と地域差

最後に、意志・勧誘用法を取りうる動詞の非過去断定形に接続する「ベー」と「ダンベー・ダッペー」の用法と地域差を見る。表 6 が用例数である。

表 6 「動詞+ベー」「動詞+ダンベー・ダッペー」の用法

	栃木	茨城	千葉		群馬		埼玉	神奈川	計
	ベー	ベー	ベー	ダッペ	ベー	ダンベー	ベー	ベー	
推量		3		2	1	2			8
確認要求		1			1				2
意志	3	2	19		61		3	4	92
勧誘	1	2	4		14				21
計	4	8	23	2	77	2	3	4	123

9 節の表 5 から予想されたことであるが、全体に、推量・確認要求より意志・

勧誘、とりわけ意志の用例が圧倒的に多い。

推量・確認要求用法と意志・勧誘用法の両方に用例の見られた茨城、千葉、群馬の各県について、6.2.2に挙げた先行研究の内容と照らし合わせながら形式と用法の関係を見ていく。茨城では「べー」のみが現れすべての用法を担っている。千葉、群馬では、推量を表す専用形式「ダッペ」「ダンペー」が使われている。意志・勧誘は「べー」が担い、6.2.2で示したとおり両用法を異なる形式で表す傾向が確かめられる。ただし、群馬では「べー」にも推量・確認要求用法の例がある（用例は利根郡利根村、吾妻郡六合村）。これに関しては篠木（1994）が、利根村、六合村を含む群馬県北部地域では推量に「べー」と「ダンペー」が併用されることを指摘しており、この方言の機能分化途上の状態を反映しているものと考えられる。一方、6.2.2で推量用法に「べー」と「ダッペー」の両方が見られた千葉には、「べー」の推量用法の例はなかった。資料に現れていない場合はその用法の有無を判断することができないが、その点を留保して考えると、以上について先行研究と齟齬する点は見出せないと言えよう。

次に、茨城、千葉、群馬の各用法の例を挙げる。群馬は推量用法に「ダンペー」と「べー」の両形式が現れる利根村、六合村の例を挙げる。

茨城県（久慈郡大子町）

- (18) 「ご飯食べてな、熱いときには、お湯飲むときにおこうこ出してくれべえから」〈推量〉 (109たくあん風呂)
- (19) = (4) みみずが歌、歌うべえよ、「コーロ、コロ」雨の降るとき。〈確認要求〉 (9 蛇とみみず)
- (20) お父つつあま、「おれも行ってくべえ」っていったと。〈意志〉 (58 俵薬師)
- (21) 「お爺さん、お爺さん、洗濯に行つてこういう箱を拾ってきたんだがら広げでみべえ」〈勧誘〉 (19 桃太郎)

千葉県（市原市）

- (22) 「家が変わったことがあるだっぺから、早、家いもどつてみるがいい」〈推量〉 (33まま子の釜ゆで)
- (23) 「わたしゃ千両出せば買えるちゅうから、千両で買うべえと思つて来ただ。」〈意志〉 (73一目千両)
- (24) 「こういうふう、二人でただいたつておえねえから{しかたがないから}、なんでん {なんでも} 商売 {しょうべえ} やるべえ」〈勧誘〉 (73一目千両)

群馬県

- (25) それだから、むかしつから竹の節、塩一升ちゅうことあるだんべ。〈推量〉 (64男女の福分：利根郡利根村)
- (26) = (2) 「まあよかった。これで貧乏神、追つ払つたから、これからはちつとはいいことがあるだんべ」〈推量〉 (100何が一番こわい：吾妻郡六合村)

- (27) 「白だらついただから食うべえ」〈推量〉 (27さる婿入り：利根郡利根村)
- (28) 「食わねえがあるか。口いくっついてべえ⁽¹⁹⁾や」〈確認要求〉
(79柿は羅漢さん：吾妻郡六合村)
- (29) 鉄びんをとっても大切にしてくれいにみがいて、あんまりきれいにみがいたこんだから、洗って水入れべえと思つたら下へ落としてしまつて、〈意志〉
(75上がるわさ：吾妻郡六合村)
- (30) 「どうだ、村に産があるからおまえ行くべえじゃねえか。」〈勧誘〉
(64男女の福分：利根郡利根村)

11. まとめと今後の課題

以上、方言昔話資料を方言研究の資料として利用するにあたって、その資料性的一端を把握するために、『日本の民話4 関東』を取り上げて、検討を行ってきた。助動詞「べー」を中心とした推量・意志の形式の現れ方を、先行研究・調査による伝統的関東方言の傾向と比較、検討した結果、次のことがわかった。

- ① 方言形式が主流であるが、各地の実際の言語状況の違い、すなわち、方言中心地域と共通語使用地域の違いに応じた共通語形式の使用が認められる。
- ② 「べー」(推量専用形式の「ダンべー・ダッペー」を含む)については、接続、用法のいずれにおいても、伝統的関東方言としての特徴をよく反映している。
- ③ 使用地域が限られる希少な形式や用法も記録されている。一方で、語りのことばとして、日常言語とは位相の異なる言い回しや、語りの場の聞き手を意識した表現などが一部見られる。

このように「べー」を指標として評価する限り、『日本の民話4 関東』収載の昔話は、伝統的関東方言を記録した資料として利用することが可能であると考えられる。話者の生年が、主として明治20年代から30年代であることから、近年の調査ではすでに得られない言語事実を見出すこともできよう。今回は資料性の検証のために既知の事実を中心に扱ったが、方言研究の資料としては、そのような観点からの活用が本来期待されるものである。

本稿が扱うことができたのは、一つの資料の一つの事象に過ぎない。言語事象によっては慎重な扱いが必要な場合もあるだろう。資料ごとに特色も様々である。実際の研究は、具体的な言語事項の分析を資料性の評価を行いつつ進めることになる。考えてみると、方言を反映する文献に基づいて方言の歴史を記述する文献方言史研究では、すでに長年、「そこに現れている言語現象が、本当に方言的事実なのかどうか、見極めが難しいものが多い」(久保蘭2023= 迫野1998の引用)という課題に向き合いながら研究が進められてきた。課題の質は同じではない

が⁽²⁰⁾、方言昔話資料による方言研究の資料性の問題は、方言研究が対象を共時的な方言から近過去の方言へと広げる中で生じてきているものであるとも言えよう。

引用文献 (URLはすべて2023年9月12日最終閲覧)

- 新井小枝子 (2017)「群馬県藤岡市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集 (3) 活用体系 (2)』JP26244024報告書、<http://hougen.sakura.ne.jp/shuppan/2017/3-06.pdf>
- 飯倉義之 (2005)「「探訪」の技術史」國學院大學説話研究会・國學院大學民俗文学研究会OB有志『学生研究会による昔話研究の50年 —フィールドワークの記憶と記録—』
- 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編 (1984)『講座方言学5：関東地方の方言』国書刊行会
- 井上史雄 (1979)「昔話の方言学的研究」『日本昔話大成12』角川書店
- 井上史雄 (1985)「第11節 現代東日本のペイの分布と変化」『新しい日本語 —《新方言》の分布と変化—』明治書院
- 井上史雄編 (1991)『東海道沿線方言の地域差・年齢差 (Qグロットグラム)』東京外国語大学語学研究所
- 木部暢子 (2014)「鹿児島方言の「イッ」と「イタッ」—テキストを使った方言研究の実践—」『西日本国語国文学』1
- 工藤真子 (2022)「秋田県方言オノマトへの形態的特徴 —昔話資料・方言辞書を用いて—」『方言の研究』8、ひつじ書房
- 久保蘭愛 (2023)「文献に基づく方言研究の方法」『方言の研究』9、ひつじ書房
- 国立国語研究所 (1993)「方言文法全国地図3」大蔵省印刷局、https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html
- 国立国語研究所 (2002)「方言文法全国地図5」財務省印刷局、https://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html
- 小原雄次郎 (2022)「方言昔話資料の収集とその資料的価値の調査」方言文法研究会2022年第1回研究例会資料、<https://researchmap.jp/ykohara/presentations/36682105>
- 酒井雅史 (2019)「関西方言における素材待遇形式の分布—読みがたり昔ばなし資料を手がかりに—」『阪大日本語研究』31
- 酒井雅史 (2021)「読みがたりむかし話資料にみる存在動詞の分布」『甲南国文』68
- 追野虔徳 (1998)『文献方言史研究』清文堂出版
- 佐々木冠 (2017)「茨城県水海道方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集 (3) 活用体系 (2)』JP26244024報告書、<http://hougen.sakura.ne.jp/shuppan/2017/3-05.pdf>
- 佐々木冠 (2018)「千葉県南房総市三芳方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典資料集 (4) 活用体系 (3)』JP26244024報告書、<http://hougen.sakura.ne.jp/shuppan/2018/4-06.pdf>
- 佐藤高司 (2013)「III 群馬県における30年間のペーの動態」『新方言の動態30年の研究：群馬県方言の社会言語学的研究』ひつじ書房
- 篠木れい子 (1993)「群馬県方言における意志・勧誘・推量表現の考察 —「ペイことば」の諸相と変化を中心に—」『群馬県立女子大学紀要 国文学国語学篇』15
- 篠木れい子 (1994)「III 群馬県方言の文法 —ペイことば—」『群馬の方言：方言と方言研究の魅力』上毛新聞社
- 杉本妙子 (2019)「茨城方言資料としての昔話の有用性の検討 —『茨城の昔話』所収の武田あき氏の昔話について—」『人文コミュニケーション学論集』4
- 白岩広行 (2011)「方言の推量形式における意味変化 —談話的機能へ—」『阪大日本語研究』23
- 玉懸元 (2010)「現代東日本方言の「ペー」—その用法の全体像—」『中国国文学』29

- 寺嶋大輔 (2023) 「民話資料の整文の実態調査と活用方法の検討 — 「宮城県の民話」を例に —」『東北大言語学論集』 31
- 新田哲夫 (2009) 「白山麓白峰の方言特徴と昔話に見られる方言の語法」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』 1
- 新田哲夫 (2010) 「白山麓白峰の方言特徴と昔話に見られる方言の語法 (2)」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』 2
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法④ 第 8 部モダリティ』 くろしお出版
- 野間純平 (2014) 「近畿方言におけるネン・テンの成立 — 昔話資料を手がかりに —」『阪大日本語研究』 26
- 日高水穂 (2018) 「昔話の談話構造と表現形式にみる地域性」『國學院雑誌』 119-11
- 日高水穂 (2020) 「昔話資料を用いた方言研究」日本方言研究会方言研究支援プロジェクト、
<http://dialectology-jp.org/>
- 日高水穂 (2022) 「昔話談話にみる待遇表現の地域差」近藤泰弘・澤田淳編『敬語の文法と語用論』開拓社
- 船木礼子 (2019) 「大方方言のとりたて形式「ンジョー」の意味・機能 — 昔話・民話を資料として —」『神女大國文』 30
- 船木礼子 (2022) 「方言談話資料と昔話資料にみる「マー」の地域差」『方言の研究』 8、ひつじ書房
- 鎌水兼貴 (2010) 「『方言文法全国地図』における話者の年齢差にあらわれる文法変化」『日本語学会2010年度秋季大会予稿集』
- 鎌水兼貴 (2013) 「言語地図にみる方言変化・共通語化—LAJDB編—」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析 成果報告書 — 言語地図と方言談話資料 —』国立国語研究所共同研究報告 12-05、<https://repository.ninjal.ac.jp/records/2700>

注

- (1) 本稿では、民話 (民間説話) の下位分類である「昔話」を中心に、「伝説」「世間話」に類する非典型的な昔話も含めて「昔話」として検討する。これらの間の方言学的な差異等については今後の課題とする。
- (2) 例えば、新田 (2009・2010) は、昔話を方言資料として扱う際に留意すべき事柄を述べた上で、「方言テキストとしては申し分のないもの」と評価する。小倉学・山下鉦次郎編著 (1963) 『白山山麓白峰の民話』 (石川県図書館協会) 中の 9 話について、詳細な語学的注釈を加えている。
- (3) 井上 (1979) にも言及があるとおり、この時期に語りに忠実な昔話資料が多く刊行されるようになったのは、1960年代以降のテープレコーダーの普及によって、昔話のテキスト化が「録音の「正確な」翻字」 (飯倉2005: 7) という形をとるようになったことが大きく関連する。
- (4) 杉本 (2019)、小原 (2022)、寺嶋 (2023) では、方言研究資料としての資料性の検討そのものを課題とした調査が行われている。
- (5) 方言昔話資料が反映する言語の性質や、「現実の方言の再現度が高い」ということの意味などについての考察は別稿に譲る。
- (6) 船木 (2022) が資料性に言及し、調査資料の一つとして用いている。
- (7) 調査には1995年刊行の新装版を用いた。
- (8) 「行く (か)」のような「動詞終止形 (+カ)」による意志表現は、『方言文法全国地図』で栃木、茨城に分布が見られ、『日本の民話』にも用例が見られるが、今回は取り上げなかった。

- (9) 他に伝統方言の「ペー」の統語的特徴として、「従属節（カラ節、ケレドモ節）内に生起する」、「疑問語と共起する」ことが挙げられる。これらは下の世代では不自然、ないし使われないとされる（白岩2011）。『日本の民話』にはどちらの用例も見られる（例（3）（12）（22））。
- (10) ここではおおむね、昭和年代に調査、記述された、明治、大正生まれの話者の方言を「伝統的方言」と呼ぶ。「下の世代」は相対的な関係であって幅があるが、先行研究全体では昭和初期から昭和末頃までの生まれの話者が含まれる。なお年代が下がるにしたがって、全体としては「ペー」の使用率は低下する傾向にある。新しい変化は其中で生じているものであることに注意。
- (11) 後の用例の検討に触れるところがある。
- (12) 終止形末尾の「ル」は撥音化または促音化して、「起キンペー」「起キッペ」のようになることが多い。形容詞の語幹の連母音は融合して「タケーペー」のように長母音になることがある。
- (13) 短音化した「ダンベ・ダッペ」も多い。他の音変異について注（12）に同じ。
- (14) 推量と意志の両方を「ペー」が担う古い体系が、推量と意志とで形式の区別のある東京中心部の体系（「推量＝だろう」「意志＝（よ）う」）と接触したことを契機に、「だろう」と同じく名詞述語文の推量形式を資源として、専用の形式として析出されたものとされる（井上1985）。「ペー」が推量とともに意志の用法を持つのは動詞だけなので、推量と意志を別形式で言い分けるニーズは動詞で生じ、推量専用の「ダンペー・ダッペー」はまず動詞の非過去断定形で使われ始めたと考えられる。実際、『方言文法全国地図』142図「高いだろう（推量形）」を見ると、図2の動詞と異なり、形容詞への「ダンペー・ダッペー」の接続は、東京多摩、神奈川東部といった東京中心部に接するエリアにほぼ限られている。佐々木（2018）でも「ダッペ」は動詞のみに接続している。
- (15) 玉懸（2010）が宮城県仙台市方言の「ペー」について記述するような、それぞれの下位区分にあたるより詳細な用法については本稿では扱わない。
- (16) 茨城に見られる「カクンダッペー」の「ダッペー」は、接続から見る限り、推量専用形式の「ダッペー」ではなく、名詞述語と同じく「断定辞+ペー」にあたる形式である。
- (17) 佐々木（2017・2018）、新井（2017）には、茨城県水海道方言、千葉県南房総市三芳方言、群馬県藤岡市方言の、動詞以外の述語を含めた意志形、推量形の体系が示されている。各方言の「ペー」と「ダンペー・ダッペー」の用法の分担関係を詳細に見ることができる。
- (18) (11)(12)の例の「ペー（ッペ）」は、「推量」というより、主張を控えめにするための「断定回避」（日本語記述文法研究会2003：149）と捉えるのが妥当であるように思われる。本稿ではこのような例も、意志・勧誘ではなく推量に関連する用法と捉えて「推量」に分類した。
- (19) 「くっついていべえ」の下線部が脱落した形
- (20) 録音に基づいて忠実に文字化した資料を活用できること、またその録音にアクセスできる場合もあることは、基本的に書きことば文体による文献を扱う文献方言史とは大きく異なる。

付記

本研究はJSPS科研費JP20H00015、JP 23H00635の助成を受けたものである。